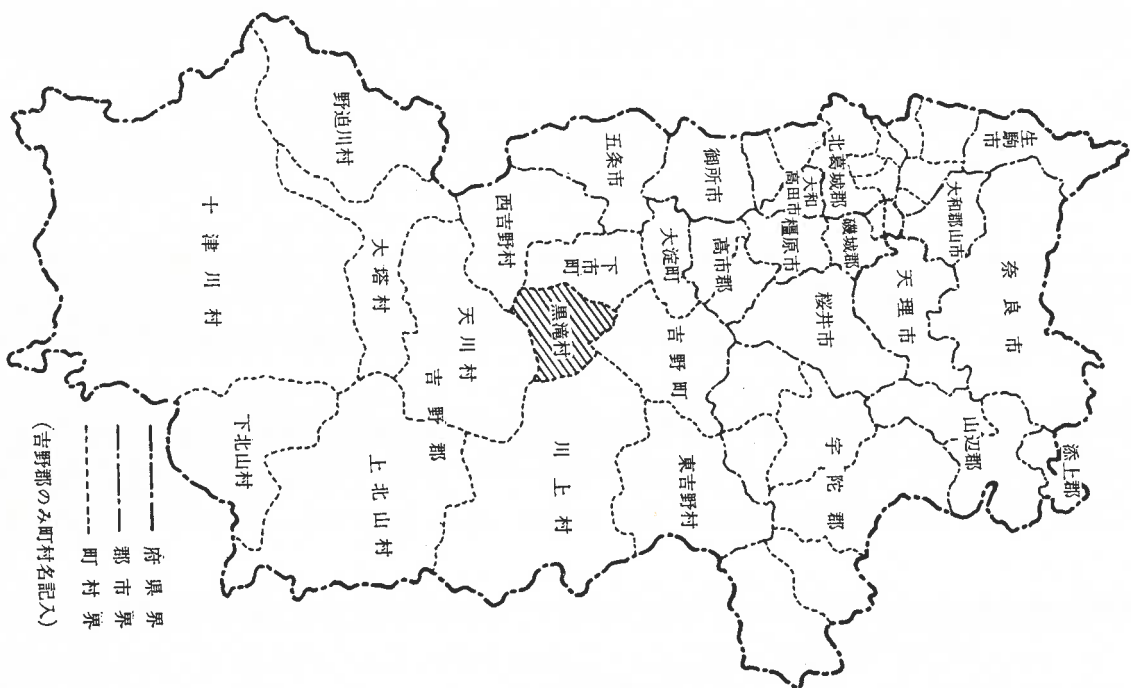


陽壽延年

野林業地帯の美林が育てられ、谷底は集落が散在して農林を主とする環境にふさわしい生産が営まれている。地
形や社会環境の関係で、経済、交通、生活等何れも西北方の吉野川本流溪谷から奈良盆地等の近畿中央部方面へ
の指向性が強い。

本村の四周との関係を見るに、本村（中戸の役場より、以下同じ）を中心とする四周の中心地への直線距離は別
図に示す通りである。これを詳しくみると、本村の西北及び西は広く下市町に接し、その中心地の下市へは本村
の中心から西北約一〇 kilometre、途中を峠を越えて結ぶと自動車で半時間で達する。黒滝川沿いに下り五条に出るより
も、早く吉野川本流に沿う経済の中心地下市に出られる故、昔から関係が深く、本村の門戸となつて来た。下市
の北方、吉野川対岸大淀町下湖に近鉄電車吉野線の「下市ロ」が設けられるとともに、新しい本村の門戸とな
り、奈良盆地の各都市を始め、近畿中央部の各地と結ばれるに至つた。盆地南部の橿原・桜井・大和高田等の諸
市（二二・五 kilometre）へは一時間前後、県政の中心奈良市（約四〇 kilometre）や経済の大中心大阪（約五〇 kilometre）へはそれぞれ一
時間半で達し得て、非常に便利となつてゐる。西方へ黒滝川に沿つて下ると、下市町丹生地区に入り、さらに西
吉野村城戸（一〇 kilometre）、和田等を経て五条市（約一五 kilometre）に達する。また城戸から国道一六八号線（旧西熊野街道）
は南方天辻峠の峻を越え、大塔村の中心辻堂（約一八 kilometre）、十津川村の中心小原（約三五 kilometre）を過ぎ、南下すれば、
はるか和歌山県新宮市（約七〇 kilometre）に達し得る。次に本村の西南の一部は直接西吉野村宗松地区に接し、笠木峠か
ら道路で結ばれている。本村の南は天川村と隣り、笠木峠を越えて同村の中心川合（約七 kilometre）に至り、それから
各地に通じている。天ノ川に沿い下ると南日裏・和田等を経て大塔村阪本（約一五 kilometre）で一六八号線に合する。上
流は洞川（約五 kilometre）へ大迂回して通じているが、本村の中心部から東南へ、昔から大峯参りに用いられた道が小南



奈良県における黒滝村の位置

本村の北方は吉野町と吉野山の奥の千本付近で一部接していて、本村鳥住から古い山道で結ばれていた。現在

大峯山脈を横断して自動車が開通すれば本村とも非常に接近することになる。

本村は昔の黒滝郷の地で、町村制実施の明治二十二年（六五）に丹生地方と共に南芳野村の誕生を見たが、同四十五年（九三）七月一日東部が黒滝村、西部が丹生村（後、下市町に合併）に分割

あって、奥吉野の諸村の如き極端な稀薄はまぬがれている。人口減少率についても、吉野郡の村中では割合少ない方である。本村は南北約八・五畝東西九・五畝で、村の形状は不規則な塊状をなし、役場は、そのほぼ中央の



中戸の川戸に設けられ、川戸に続く寺戸付近に小中学校をはじめ、村政の公共建物が設けられ、村政の中心部となしている。

(堀井甚一郎)

2 地 形

概 説

本村は先にも述べた如く、口吉野の吉野川流域から奥吉野の十津川流域への入口、両者の中間地帯に位している。したがって地形、地質は吉野川溪谷から壮年期の吉野山地への漸移地帯の特色を示している。山や谷の起伏は全般的に南するに従って甚だしくなり、部分的にみると西から東するに従って、起伏を増す状態をなしている。すなわち、吉野川本流の溪谷から、その左岸(南岸)より注ぐ秋野川の谷をさかのぼると、その最上流部で本村に入り、次に小山脉の峠を越すと本村の中央を西流する黒瀧川(下流丹生川)の流域に出る。河勢山勢はそうはげしくなり、さらに次の支脈を南に越す天川村に属する十津川の上流天ノ川溪谷になり、一段と起伏の大きな峻峯深谷の壮年期地形となる。また、本村内のみについても、西部から東部に進むに従って一般に河川は急となり、山勢ははげしくなっており、東端はけわしい大峯山脉の主脈で限られている。

まず本村を含む近畿南部の紀伊山地(吉野山地はその主部)の広域地形について概観することにする。わが国西

南日本には中部地方から近畿・四国・九州へと東西に走る非常に重要な、いわゆる「中央構造線」(Median Line)又は「中央構造帯」と称するものが存在している。これが、近畿地方では三重県の柳田川・本巣及び和歌山県で吉野川(下流紀ノ川)の溪谷に沿って走っているのである。この構造線によって分かれる南部を「外帯」、北部を「内帯」と称し、両地域は地形・地質の自然景観はもとろん、その影響を受けた人文景観も非常に差違が生じている。

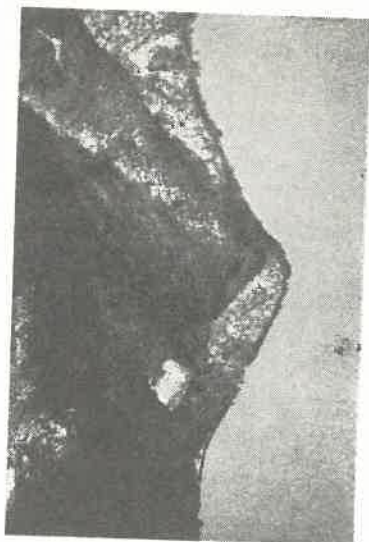
本村を含む外帯の地形、地質の特色を示す紀伊山地の主部の吉野山地は、東西の方向の褶曲山脉よりなっている。地質は中央構造線の走る吉野川溪谷から南へ、古生層の三波川層・秩父帯、中生層の日高帯と水成岩の古い層より次第に新しい層が東西に帯状列になっている。本村はその秩父古生帯から日高帯層に属している。地形は最初は東西方向の褶曲山脉であったのが、その後の侵食により第二次的な山形は南北性を示している。南方より熊野川の上流十津川と北山川が横谷を作って深く入り、吉野川の上流及び支流の丹生川(上流は黒瀧川)と共に、東・中・西の三山脈に分けている。東部は大台ヶ原山を主峯とする台高山脈で、中央は大峯山脈(大和アルプス)で最も壮年期の地貌を示し、本村の母体となる山脈、西は伯母子山地となっている。

大峯山脈は吉野山地の中央部、南北性をなす延長約五〇歳の長大なものである。山脈の北端は桜の名所吉野山に起り、本村の東境にそびえる四寸岩山(一、二三六呎)・大夫井ヶ岳(一、四三九呎)から山々(一、七二〇呎)・稲村ヶ岳(一、七二六呎)・大普賢岳(一、七八〇呎)・行者還岳(一、五四七呎)などに連なり、行者還の鞍部を経て、再び高度を増し、弥山・近畿の最高峯の八経ヶ岳(八経ヶ岳・八剣山一、九一五呎)がそびえ、さらに南へ明星岳・七面山・仏生岳・孔雀岳・釈迦ヶ岳・大日岳等の一、五〇〇呎以上の高峯を連ねて南方はるか玉置山(一、

○七七畝)に達している。「近畿の屋根」「大和アルプス」などと称せられ、山岳美・溪谷美・森林美にすぐれた吉野熊野国立公園の一部となっている。また、この急峻な山嶺を対象として古く修験道が発達し、山上ヶ岳は今なおその根本道場となっている。

各 説

本村に關係のある山地は大峯山脈の主脈の北部とそれから西方へ派出する支脈からなっている。大峯山脈の北部の主峯で「山上参り」で名高い山上ヶ岳(一、七二〇畝)から尾根は西北に延び、大天井ヶ岳(一、四三九畝)・四寸岩山(一、二三六畝)・青根ヶ峯(八五八畝)と次第に高を減じ吉野山を経て吉野川溪谷に尽きる。大天井ヶ岳から青



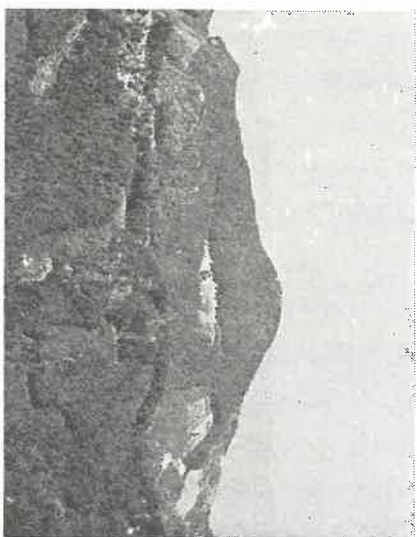
大 天 井 ヶ 岳



四 寸 岩 山

根ヶ峯付近まで約八畝は地形的には黒滝川と吉野川上流の支流高原川・大津谷などとの分水嶺であり、行政上は本村と川上村の村界となっている。この尾根伝いの道は吉野山から山上登山道として古くから大いに用いられてきたが、近年バスで洞川経由で登る者が大部分となり、さびれるに至った。大天井ヶ岳は本村の東南隅に位置し、四寸岩山を小天井を称するのに対して、かく呼ばれ、非常に雄大なヒラミッド型をなして天空にそびえ立っている。ここから西方へ延び、天川村との境をなしつつ扇形山に続く支脈を分岐している。四寸岩山は小天井岳とも称せられ、ここから支脈を西方の柏原山に出している。さらに本村の東北隅の青根ヶ峯付近から百良岳方面に支脈を出している。

支脈についてみるに、大天井ヶ岳から西に分かれる支脈は南方十津川の上流天ノ川と黒滝川すなわち吉野川の水嶺をなすもので、本村の南端、天川村との境界もなすものである。小南峠・扇形山(一、〇五三畝)を経て本村の西南端の笠木峠に延びている。小南峠は下市方面から本村の中心部を経て洞川へ近道となっていて、峠にはトシネルが設けられている。扇形山から小支脈が北に分かれ、先端は数条に分かれて、寺戸から長瀬間の黒滝川の左岸に達している。また笠木峠は国道三〇九号線の峠となり、長トシネルが開さくされている。村境は北に延びる小支脈を伝ひ、長瀬の蛇谷で黒滝川の谷に下っている。なお笠木峠の西付近で主脈は二分し、一方は西南に向かい高城山・天辻峠に続き吉野川と十津川の分水嶺をなし、他方西北に向かつて櫛ヶ岳に続き、その両脈の間の谷に宗川・松川(丹生川の支流)が西に流下している。四寸岩山から西に分れる小支脈は黒滝川本流と脇川の両谷の間をへだて柏原山(九四三畝)となり、さらに延びて本村の中央寺戸の両川の合流点で尽きている。本村の東北隅青根ヶ峯から分かれる支脈は西南に延び百良岳(約八六〇畝)となり地蔵峠(五五三畝)を経て西に向う山嶺とな



百 貝 岳

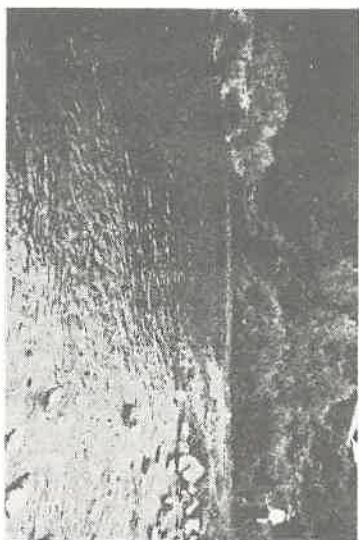
る。この支脈は、南側の黒滝川の支流の川と北側秋野川の分水嶺をなすが、本村の大字鳥住は秋野川流域にあり、村境は北側の山麓付近となつてゐる。なお百貝岳は古く百螺山と称してゐて、山頂に近く鳳閣寺があり史蹟にとんでゐる。地藏峠は本村と下市との自動車道路が通じてゐるが、この峠付近は北側も本村に属してゐる。この峠から小支脈が西南に延び、脇川や黒滝川本流の谷と栗飯谷川の谷の間の丘陵の脈をなしてゐる。また本脈の尾根はこれから西北方に進み六〇三坪の峯付近で本村と下市町の境界線がこの分水嶺を伝ふことになり、船若寺山（七三三坪）で主脈は西方の下市町の広橋峠を経てさらに西走する。村境はこれから西南、さらに南へ彎曲する栗飯谷と下市町の長谷川の谷の間の小支脈を伝つて長瀬に至つてゐる。以上の如く、本村の山地は東に高峻な大峯山脈が走り、南北には、それよりの支脈がそれぞれ西方に延び、さらに村の西は、南北の支脈から、それぞれ小支脈が黒滝川岸に迫つてきてゐて、全く山々に囲まれ地形上のまとまつた一地域を形成してゐる。山勢は東部にはげしく、南部がこれに次ぎ、北は割合低く、西方低く狭い出口となり、これらは四周への経済交通など村民の生活に種々影響を与えてゐる。なお山地は吉野林業地帯の一中心地として杉松の美林の造営で有名である。これは自然環境を活用し、多年にわたる人々の工夫努力による集約的な林業経営の賜であ

る。
（林業の
頂参照）

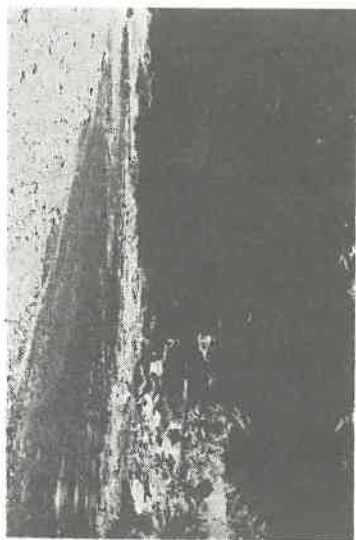
と本村の溪河川

黒滝川の溪谷 本村は前述の如き諸山脈により四周は囲まれていて、これらの山嶺から発する諸川は集つて黒滝川となつて西流し、本村はほとんど大部分はこの川の流域からなつてゐる。しかし、厳密にみると、北部の極く一地域のみ秋野川の最上流の流域に属してゐる。まず黒滝川流域について詳しくみることにする。

黒滝川の水源は、本村の東南隅にそはだつ大峯山脈の大山井ヶ岳（一、四三五坪）付近に発し、非常な急流をなしつつ西北流し、やがて四寸岩山（一、二三三坪）付近より西南に流下する伊谷の水を合し、大字赤滝から中戸へV字形谷をなして西流する。河岸にほとんど平地をかき、集落は狭い河岸に列村を造る他は山腹の緩斜地を求めて立地してゐる。中戸の川戸で左岸（南岸）より、小南峠扇形山等から流出した小流を集めた川谷川を合し、間もなく寺戸で、右岸（北岸）より脇川を合する。この川は本村東北隅の青根ヶ峯（八五八坪）の南方付近から発し、V字形谷をなしつつ西南流して大字槇尾を横切り、大字脇川付近に流出して河岸に細長い河川段丘の平地を形成する。川戸・寺戸は本支流の合流点で本村のほぼ中央に当る故集落の発達を促してゐる。この付近から水量も増し、甚だしい曲流をなしつつ西流する。曲流の円滑斜面にはそれぞれ河



黒滝川（寺戸の本流と脇川の合流点付近）



黒滝川 (蛇谷の本流と笠木川の合流点付近)

岸段丘を形成する故、これを利用して水田が営まれ、堂原・御吉野の集落も右岸の適地に立地している。なお、曲流状態を測定するに、寺戸の本流と脇川の合流点から長瀬の村界までの直線距離は約二・五碇であるが、蛇曲する河川の実長は約六・五碇で約二・五倍の甚だしい長さとなっている。やがて右岸から栗飯谷川を合する。この川は本村の西北部を弓状をなして西南流し、この谷の細長い小平地を求めて水田と栗飯谷の人家ができている。長瀬の蛇谷付近で下市町丹生地区に流出するが、ここで左岸から笠木川を合流する。この川は本村の西南隅の笠木峠付近に源を発し、V字形谷をなして西北流し、笠木及び桂原の集落はこの河谷に適地を求めて立地している。

なお黒滝川は本村から下市町丹生地区に流出して丹生川と称せられ、甚だしい曲流をなして西流し、さらに西吉野村を横断して、五条市に入り流れを北に転じ、同市二見で吉野川本流に注いでいる。全長約四二碇、そのうち上流の本村に属する部分の長さは約二碇、中流の下市町域は約八・五碇、下流の西吉野村及び五条市域は約二一・五碇となっている。

以上の如く黒滝川上流の本支流は共に甚だしいV字形谷をなして壮年期の溪谷形成をし、次第に川幅を増しつゝ流下する。本村の中央部の寺戸から西方長瀬の村界までは、甚だしい曲流作用により、本村としては割合巾を

もつ、細長い溪谷を形成し、水田による農業経営の地帯となり、集落も適地を選び断続しながらも割合多く分布している地帯となっている。また、かつては本村の木材はこの河流を利用して筏として搬出していたが、道路の改修、トラッカの普及により全く行なわれなくなった。

秋野川の上流溪谷 本村の北端の大字鳥住の東西約一・五碇・南北約一碇の小地域は秋野川流域に属している。秋野川も吉野川の支流で、その最上流部がこの地域から発している。すなわち大峯山脈の青根ヶ峯から西南に分れた支脈の百見岳(約八六〇呎)から地蔵峠の北斜面から発するもので、非常に細い深いV字形谷を作つて流下している。中でも鳥住の西側の谷が特に甚だしく、その小V字形谷の頂が地蔵峠の鞍部となつていて下市から秋野川の谷を利用して本村に入る道路が通じているが、S字形をなし、ようやく地蔵峠に達する。秋野川は間もなく本村を離れ、下市町才谷(元、本村領内)を過ぎるが、付近はなおV字形谷をなしている。やがて西流して谷も少し開け水田を灌溉し、付谷付近では北流に転じ、再び狭い小峽谷を作り細長い街村をなす下市の町並に沿いつつ流れ、町の北端で吉野川本流に左岸(南見)から流入している。(堀井甚一郎)

3 気 候

奈良県の気候はがいて温暖であるが、なおすこし注意すれば地形および海洋その他の黒滝村の気候の特色と関係により地域的に差異があり、本県ではとくに北部奈良盆地と南部吉野山地とはその

差がなほだいということがわかる。これをひろく近畿地方の特色について考察してみると、太平洋に面した紀伊半島地方は海洋の影響をうけ温暖多雨の気候型となり、いわゆる「表日本式気候」の特色を示している。また日本海岸一帯の地方は冬季風雪が多く気温低下し「裏日本式気候」であるが、中央部の奈良・京都などの諸盆地は温暖曇雨で西につく「瀬戸内気候」と類するが、海洋に遠ざかった地域であるためやや隣接諸地方の気候と異なり、寒暑の差がわりあい大で「内陸性気候」を示している。したがって奈良県はこの内陸性気候を示す奈良盆地から海洋性の表日本式気候である紀伊半島の特色に漸移する地帯である。なお吉野山地は海からすこし離れ、また千数百呎の山岳であるため海洋の影響をうけた「山岳気候」を示している。黒滝村の気候は本村が吉野山地の北端部に位置を占めているためこの吉野の山岳気候に属しており、そのものも著しいものは大台ヶ原山にみられるところである。

気候を構成している要素としては気温・降水量（雨量）のほかに雲量・湿度・風・気圧などがあり、これらの気候要素は緯度・海陸分布・海流・海拔高度などの気候因子と結合して変化のある気候をつくり出すことになる。ここでは右の気候要素のうちいっばんに用いられる気温と降水量とをとりあげて、奈良県各地の気候の特色とそれに占める黒滝村の地位についてみることにしよう。

気 温

奈良県の年平均気温分布をみると、奈良盆地はいっばんに高温である（奈良一五・二度、八木一五・五度）。大和高原・宇陀山地はやや低く（南之庄一二・三度、大宇陀一三・七度、曾木一三・一度）、また吉野川の谷は下流から上流に進むにつれて低く（五条一五・五度、大淀一四・八度、川上一三・五度）、吉野山地帯は地形の関係で気温もつとも低く一〇度前後となり（荒神岳九・五度、洞川一〇・二度）、と

くに大台ヶ原山では五・九度に降る。さらに南方北山川・十津川の下流に進むにしたがって高温となり一五度ぐらになる（寺垣内一四・九度、玉置山一四・九度）。黒滝村の年平均気温は一・〇度で吉野山地帯のものであることを示している。^(表一)

奈良盆地は海洋から山岳により隔てられているため内陸性気候となり、夏は県下で最高温であり冬はわりあい寒く年較差（ねんかくざ、一年における最暖月と最寒月の平均気温の差）がそうとう大きい。吉野山地帯は地形の関係でいっばんに気温が低く、大台ヶ原山は最低〇度以下に降り最寒地である。要するに夏もつとも暑いのは奈良盆地で、つぎが吉野川下流溪谷、まだもつとも涼しいのは吉野山地、ついで大和高原である。冬のもつとも寒いのは吉野山地で、もつとも暖いのは吉野南面地域南端部と吉野川下流溪谷とである。吉野山地に属する黒滝村でも夏もつとも涼しく八月で二三・六度、冬もつとも寒くて一月（一・五度）となっており、年較差二十五・一度となる。^(表一)

降 水 量

年降水量の分布をみると、奈良盆地はもつとも少なく一、五〇〇ミリ以下（奈良一、三八二ミリ、八木一、四二三ミリ）で位置・地形の影響をよく示していて、降水量が少ないことは水田の灌漑用水に不足を生じ、これを補うため溜池が非常にたくさん造られておりまた吉野川の水を分水して導水している。降水量は盆地底から周辺に移るにしたがって増し、大和高原・宇陀地方・吉野川流域はいっそも多くなり一、五〇〇（一、〇〇〇ミリ）、さらに吉野山地は非常に多く（二、〇〇〇〜四、〇〇〇ミリ）、また西から東へ行くにしたがい、いっそも増し、大台ヶ原山の最多雨地に至っている。大台ヶ原山は年降水量じつに四、七八一・五ミリに達し、わが国における最多雨地帯の一つでこれはまったく地形と風向、湿度とが密接に関係し湿润な空気の山岳に接して

の直接冷却と空気の上昇による断熱膨張によるもので、吉野の森林もこの多雨の影響をうけてよく繁茂するのである。黒滝村の年降水量も二、一〇九と非常に多いが吉野山地としてはまだ少ないほうで、本村がこの地帯の入口にあることを物語っている。^(表一)

本県の降水量の月別降水状態をみると、季節風に関係して夏多く冬少ないが、多い夏季のうち六月の梅雨期と九月の台風期はとくに多い。吉野山地では夏季八・九月にとくに多く降水をみるので、本村では八月二九〇^(表一)が最大、ついで九月二八七を示し、以下七月・六月がいずれも二百以上

の降水量となっている。降水日数については冬少なく夏多く降水量とだいたい相関連している。

降雪は地形の関係で北部の奈良盆地に少なく、南方吉野山地にかえって多い。盆地の周辺山地は

表1 八木・南之庄・黒滝の気候 (上段気温℃、下段降水量mm、奈良県年鑑・黒滝東小資料)

月 別	1 月	2 月	3 月	4 月	5 月	6 月	7 月
八 木 {	4.2	4.9	7.7	14.1	18.5	22.6	27.1
南之庄 {	51	62	96	117	114	193	177
黒 滝 {	0.9	1.4	5.0	10.8	15.5	19.0	23.7
	56	64	100	132	139	231	181
	-1.5	0.2	4.6	11.7	15.7	18.5	22.9
	89	103	151	151	179	242	269
月 別	8 月	9 月	10 月	11 月	12 月	年	統計年数
八 木 {	27.8	23.4	17.1	11.5	6.9	15.5	1951~1965
南之庄 {	129	204	132	79	60	1413	1896~1960
黒 滝 {	24.1	20.3	14.0	8.6	3.8	12.3	1955~1965
	157	218	149	88	62	1577	1906~1965
	23.6	18.9	11.5	4.9	1.3	11.0	1964~1967
	290	287	183	88	77	2109	1964~1967

盆地底よりもいっばんに積雪が多く、そのうち西南隅の金剛山がいちばん早く雪姿を現わすのが常である。盆地の奈良では一年の降雪日数わずか三日であるが、吉野山地の大台ヶ原山ではじつに八一日におよび初雪早く終雪は遅い。本村でも大台ヶ原山にかい降雪の状態を示し、降雪期間は十二月一日く三月二十日、根雪期間は一月三日く二月二十七日となっており、積雪量は年間累計一・三メートルを示している。なお本村における早霜は十月二十七日、晩霜は四月九日、霜日数一七三日である。(黒滝東小資料調査による)

以上のような気温と降水量とを各月別に組み合わせてつくったものが気候図表(クライモグラフ)である。ここには奈良盆地の八木と、大和高原の南之庄、および黒滝の気候図表を示すことにする。^(表一)ちなみに、奈良東の気候区は図二のごとく七気候区となっており、これらの気候区のうち、良

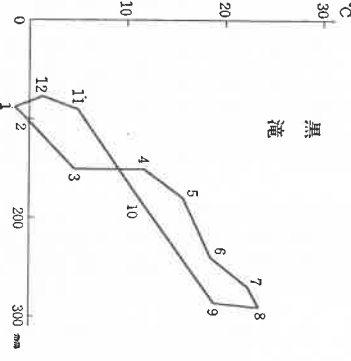
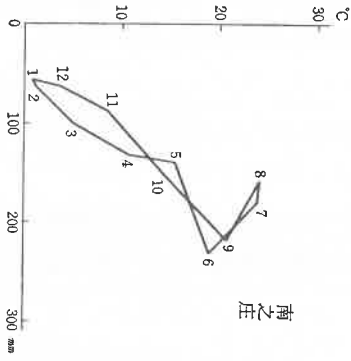
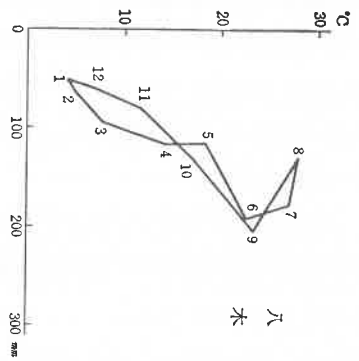


図1 各地の気候図表

好な気候区は吉野南面区、吉野川区、吉野山岳区、大和高原区、生駒金剛山区、宇陀山区がこれにつき、吉野山岳区はもともと適しない気候区のようにである。(圖二)

図一によつて、盆地の八木と、高原の南之庄、そして山地の黒滝の気候の特色をみる事ができる。各地の気温・降水量の詳細については前の各項で述べてあるのでここでは省略して、これら気候要素の総合としての八木・南之庄・黒滝の各図を比較すると、八木は縦軸にほぼ平行する形をとるのに対し、南之庄ではやや傾むき、黒滝ではいさう傾むいては斜めになっている。これは降水量が夏季(六・九月)を中心として、盆地から高原、さらに山地へ進むに

したがひ、しだいに増加していくことを示すものである。また、月別降水量の最大も、八木では九月、南之庄では六月であるのに対して、黒滝では八月となっていることがわかる。さらに気温について、図一を注意すれば、盆地から高原、そして山地へ移るにつれて、一月の最低気温がしだいに下降し、八月の最高気温もほぼ同様の傾向を示していることが明らかとなるであらう。

要するに本村は、気候のうえでも吉野山地に属する特色を遺憾なく發揮しているものであり、先にもふれたように、とくに降水量についてみると吉野山地としてはまだ少ないほうで、本村は吉野山地の入口に位置すること

を如実に物語っているものである。

(西田 和夫)

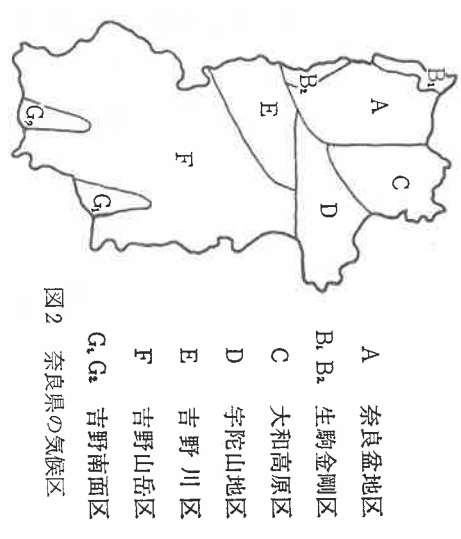


図2 奈良県の気候区

現在店としてしているものである。^(参照一)

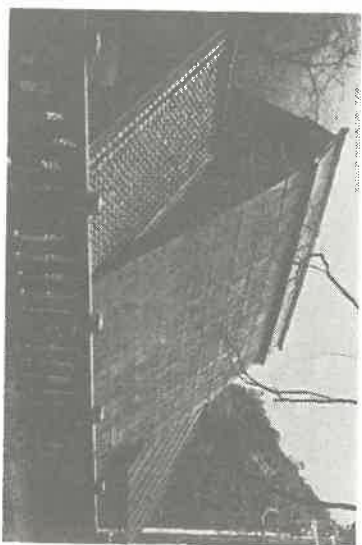
中戸は現在一・五世帯、三五六人で、ほぼ全村平均の過疎状況にちかい。^(参照二)田はわずか一・七畝(一二二)

畑七・三畝(五五戸)、果樹園八五畝(六戸)、山林一八五畝(三八戸)にすぎない。(現況は一九七〇年世界農林業センサスによる。以下おなじ)しかし、畑および果樹園面積は本村中もとても広い面積を占めている。けれども、明治

と云う。

川戸の中央にある河分神社は、前述のように中戸はもちろん、近隣をあわせた六大字の産土神であるが、その三差路の角に代表的な古い民家がある。(参照)森秀樹宅で、旧庄屋、切妻大和棟の堂々たる構えで、母屋の部分はトタンで覆い、カマドの部分はトタン葺としていて、裏にあった土蔵の棟杣に天明二年(一八二一)と記されていたので、母屋はこれより古いものと思われる。昔からの間屋で樽丸を多く取りあつかい、荷受間屋でもあったが、現在は菓子、食料品、雑貨などを販売するいわゆる田舎百貨店となっている。しかし、平面図にもみられるように、六間取りの大きな家で、土間も広くつてあり、これを

ので、これらを経てやがて小南峠をこえて天川村に至った。小南峠は約一、一〇〇呎の高度にあり、これに達するには峻い屈曲した道で苦労したらしく、この小南峠を俗に米投峠とも称したほどであるという。



川戸の森秀樹宅



戸三



序

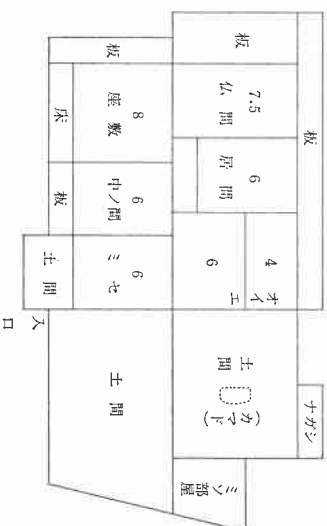


図1 川戸の森秀樹宅平面図



物 入		土 間	
押 入	8 納 戸	8 オイエ (古所)	入
押 入	8 敷 座	8 ミ 七	
板			

図3 脇川 脇坂 博宅

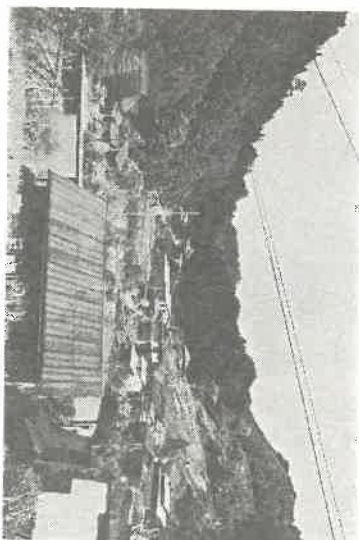
滝川に寺戸で合流する支流、すなわちワキの川に沿う集落の意であるという。

現在三九世帯、一四三人で、最近の世帯減は全村の平均を上廻り、人口減は平均以下を示している。(註)田二・四〇(二戸)、畑も二・四〇(二戸)で、山林は二四・二畝(二四畝)にすぎない。明治初年の田四・一畝、畑四・〇畝、山林一四八・〇畝に比較すると、田・畑は半減、山林はまことに著しい減少となっている。一部の畑では近年、シャクナゲ・ソウジなどの植木栽培を試みるものもある。しかし、大部分は山林労働を仕事として

いるのである。明治初年の記録によると、杉松材木板樽丸等六五、〇〇〇本とあげられていて、当時は樽丸、酒桶、それに経木などの生産が盛んであった。大正末年まで後も流したようである。現在はもちろんトラックで搬出されている。

一事業所のうち、立木を購入し伐木して素材のまま販売するもの二戸、銘木製造卸売販売一戸がある。

脇坂博宅(註)はトタン葺の古い民家である。安永七年(一七九七)というから中戸の森秀樹宅よりもさらに四年古いことにな



脇川

のまま販売するものが四戸となっている。ほかに、銘木製造卸が三戸できている。また、最近には木管製造業が三戸あり、これは下市町で習得したもので、一時は一戸以上もやっていたことがあり、現在の三戸は機械を使って箸の製造をおこなっている。吉野杉を材料とし、杉の白木の部分を箸の長さに切り、両面を削り箸の型に仕上げ、乾燥するもので、天扮(てんぞき)と松葉の二種類があり、東京を中心に関東方面に多く出荷される。なお、木材関係以外の事業所として、赤滝では旧第一小学校が廃校となったので、のあとへ村の工場誘致条例によってメリヤス工場が誘致されている。

(事業所については昭和四十七年事業所統計調査による。以下おなじ)

田はわずか二・一畝(二五戸)、畑二・九畝(三戸)で、明治初年の田二・七畝、畑七・〇畝にくらべると、ともに著しい減少であることがわかる。畑は多く山林に転換されたが、それでもなお少ない畑地に、自給用の野菜はもちろん、それ以外にコンニャクイモや杉松苗を育てているのが特色であるといえよう。

脇川は本村の中心集落寺戸の東に接し、横尾川とこれに平行する県道に沿う鍾村(れんそん)くさりのように断続しながら続いている集落である。村の西端、入口のところで海拔約四〇〇は、中央部、お寺のところ

で約四三〇は、東端にいたると四八〇はをこえる高さとなり、この間水

平的には約二五にわたって家屋が点在している。脇川の名は、本流黒

3 民 家

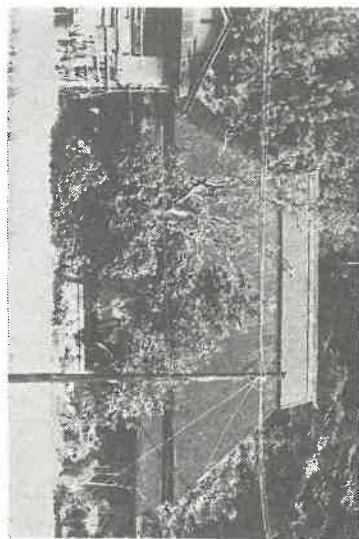
われわれの生活の場である家——それは先祖が残してくれた遺産である。古い家を眺めていると、その家の伝統とか歴史といったものが偲ばれてならない。しかし民家は、杜寺の建築とは異なり、社会の変転はうに及ばず、その家の経済や家庭環境などによって、古い形が次第に崩れていく。古い民家がそのままの姿で残されていることは全く珍らしいことである。これは生活様式の変化や、その家の周辺のうつりかわりによって支配されることが多い。

黒滝村の各地に民家をたずねてみたが、やはりこんな山の中にも新しい時代の流れが刻々と流れこんでいる。まず戸や障子がガラス戸に改まり、不慣れた昔風の台所が、すっかり現代的なタイニングキッチンに早変わりしたり、牛小屋に床がつき、新建材を張りめぐらされて、それが思いもよらぬ応接間に変ったり、古い簀の子天井が今のような新しい天井に生れかわったり、古い民家もこうして次第に新しい姿に生れかわっていくのである。草葺の屋根にトタンが覆われて古い情緒がなくなっていく。

こう考えてみると、ある民家がどれほど古いか、ということよりも、どの家が当初の古い姿を維持しているか、が大切な問題になってくる。幸にして黒滝村には、比較的当初の姿を残している古い家は何軒もあった。これは尊いことだと思いが、しかしそれは改築されたり、改造される目があるだろう。民家は、そこがわれわれの生活の場である限り、こうした変転もやむを得ないだろう。せめてこの村史に、現在目についた数軒の家を記

録にとめておきたい。

黒滝村の民家は、概して言えば平坦地のような大型な家ではない。大体整形化した四間取で土間の部分もそう広くないが多い。これは土地が不足する土地特有の現象であろう。小型の四間取り民家については、奈良県の南部から和歌山県の北部にかけて見られるものと相通ずるところがある。とくに注目すべきことは、その建立年代が記された上棟の木腿や板札がみつかった家が何軒かあったことである。民家は毎日内部から煙を出してい



脇坂 博宅

のどこを押えることができた。

脇坂 博宅 (脇川) 脇坂家は比較的良好の当初の状態でい

る。部屋は、みせのま、さしき、など、だいたい

の整形化した四間取で、土間の部分もかなり広い。古いカマドもある。だいたいどこなど造作の一部は新しくなり、屋根はトタン葺になってい

る。しかしこの地方としては典型的な民家といえよう。幸にして棟梁に上棟の槌があつてその年代を知ることが

できる。木槌の長さ四四・五尺、槌の直径一三寸あつて、柄の両面に裏書がある。

(表面) 安永七年

棟梁飯見重治郎

…月…

□村
御用

(裏面下方) □

安永七年(一七九六)は、黒滝村の民家で年代を示す資料のあるものでは、いちばん古いものとみられる。

正司直枝宅 (森家) (川戸) 商売をしているので、ちよつと気つかないが、外に出て家廻りや切妻造り

大和棟の屋根を見ていると、さすがに古い家であると感ずる。土間の部分が店になつて一部改造されているが、一歩上へ登ると六間取りの立派な家である。同家は庄屋をつとめた家で、檢地帳や古文書が残

っている。ちよつと普通の四間取りの家とは異なり、さしきは広く堂々としている。造立年代は明らかでないが

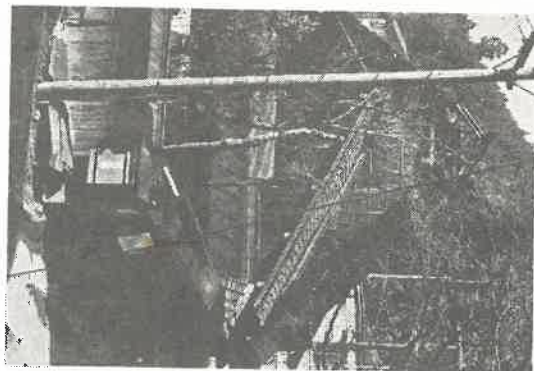
かつて土蔵をとり壊したときに発見された上棟の木槌が残っている。木槌の柄の表に「天明二年三月吉日、棟梁

飯見重治郎」裏に「治良兵衛、伝兵衛、半兵衛」と記

されている。したがつて本屋は天明二年(一八二一)より古

いものと考えられるが、ます十八世紀中〜後期ごろのも

のである。黒滝村ではいちばん古いかもしれない。



正司直枝宅

ま同家に、屋根葺替の棟札を残しているが、これによると

「干時文化第貳之壬子春下旬成就」屋根葺の棟梁は、紀州熊

七、卯八である。

岩本昭三宅 (鳥住) もと菊屋重兵衛の庄屋宅であつ

たから家はかなり大きい。すなわち六間

取りで、みせの

ま、さしきの次

に仏間をとつて

いる。ぞしきとだいたいどころが広くつとであるので、六間は噂違いになつ

ている。一部改造したところもあるが、比較的当初の姿をよく残して

いる。この建築についてはやはり上棟の木槌がある。槌は長さ四二・

八尺、槌の部分直径一一・一寸あり、柄の表面に次の墨書がある。

文化五年

棟梁 鳥住村

吉右衛門

辰六月吉日

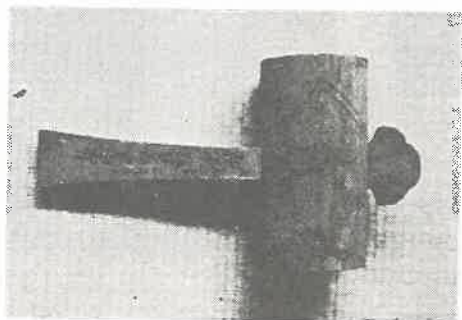
なお、別に紙の御幣を挟んだ長さ六四寸の角棒もある。大正五年と

六年に葺替をしたときの木札が見出されたが、これは当時の様子を

うかがうよい資料である。木札は上部を駒型におとした長さ三五寸、



岩本昭三宅



土蔵上棟木槌

巾二一・八芝の板で、両面に次のように記されている。

(表面)

作業人 和歌山県伊都郡紀見村字細川上
田中直吉 四名

(裏面)

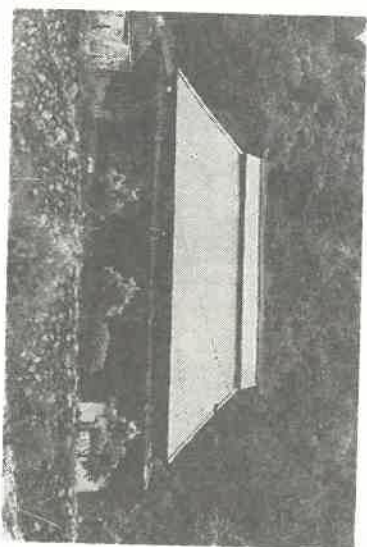
(大正六年五月二十日記録す)
使用の萱は百螺山頂より取り取る
初の実六拾圓葺葺四拾圓其の他運び
賃造用杉皮代諸雜費を併せて約
貳百圓を算す時に米價一石に付約拾八円
普通日雇賃二工に付六拾錢の時なり
実父死して四年を経る

家族六人
母 フミ 三十三才
當主 宇太郎 三十一才
妻 ミサキ 二十五才
子 伴 二才
孫 ノ 二才

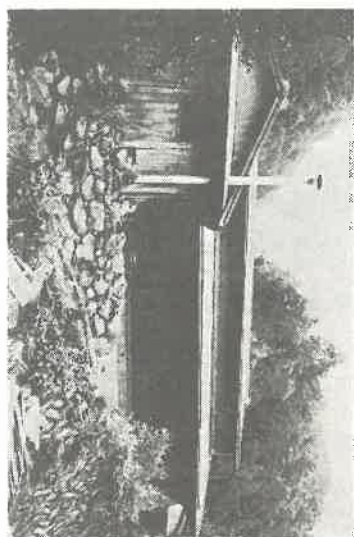
さらにもう一枚の木札があつて、その一面に次の通り書かれている。

本宅葺葺業
起 西側 大正五年九月
北南側 大正六年五月
當主 地字宇太郎

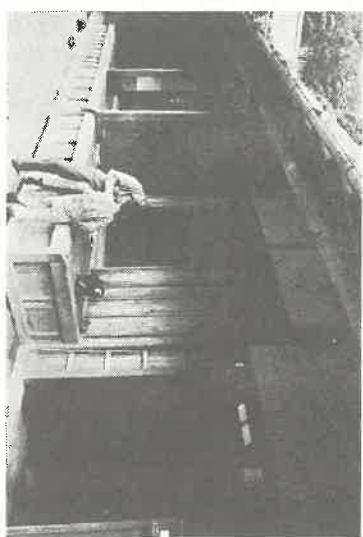
この木札にみえる地字家は、いま下淵に移っている。大正五年といえはそんなに古くはないが、こうして



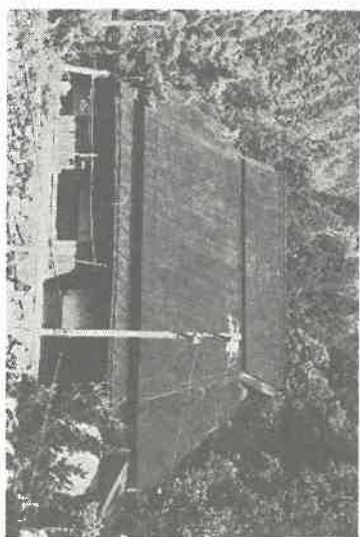
東好治宅



河合秀雄宅



河向精一宅



東佐太郎宅

いろいろ書きとめてあると、なかなか好い経済資料となるものである。
四間取りの家で、みせのま、ざしきはそれぞれ六疊で広く、だいたいところとなんどは、三疊と四疊になつてゐる。入口の土間やみせのまに簀の子天井など古い姿をとどめている。正面の雨縁も古い。しかし土間の一部から、だいどころにかけてすっかり改造されて、近代的な

インダキツチンになってしまった。その他は比較的よく残っている。屋根はトタン葺になっているがやむをえない。十九世紀後半の造立であらう。

河向精一宅 (粟飯谷)河向氏の家屋は、八十年ほど前に横尾から移したものである。表通りはみせのま、なかのま、床付のざしき、奥通りはだいご、なんど、ものいれと六間取りになっている。だいでこからすく広い十間になっている。木材もすっかりしている。草葺の屋根、表の雨縁もなかなかよい。大体十九世紀前期のものであらう。

河合秀雄宅 (長瀬)庄屋をつとめた家と伝えられ、この村ではいちばん古いといわれている。間取りは正しい四間取りになっている。

なお、この大字の岡田勘治氏の家も古かったが、昭和四十三年に取りこわされた。

(脇川)東家は、入母屋造草葺で内部は喰違いの四間取りになっている。みせのま、ざしき、少し広いだいご、少し狭いなんどからなっている。ざしきには一間の板戸のはまった押入れがあつて、半分は仏間になっている。これは前記東好治家のざしきと同一である。いま屋根はトタンで覆われてしまった。しかし古い表の縁や家の内部は比較的よく残っている。十九世紀の建築であらう。

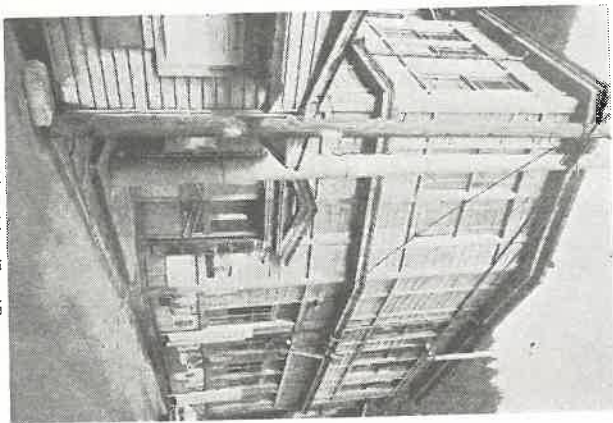
(付)黒滝村役場

最近県下の市町村役場が近代的な鉄筋建築になり、古式な木造建造物の役場はほとんど見られなくなった。黒滝村役場は後者に属するが、しかしこの建造物は、吉野郡の奥地にもかかわらず珍しい明治の洋風建築が、大體造立当初のまま、昭和の今日なお村役場として使用されていることは、県下では例のないことだと思ふ。

この建造物は、明治四十三年に工費総額八千円で建設された黒滝村材木組合事務所であつた。その当時の構造は、階上二十五坪の大会議室をもち、階下に事務室、応接室、来賓室、宿直室、小会議室、食堂、受付室、小使室、倉庫等が完備した建造物である。村役場は大正三年から使用したもので、その際階下の間仕切はとり払われ、今みるような姿に改造された。しかし柱や床、天井の痕跡などによって当初の姿を思い起すことができる。村内に電燈がついたのは大正九年八月であるから、この建物には瓦斯燈がついていていたと思われる。飾り天井と瓦斯燈は当時としてはすばらしいものであつただらう。階上はあまり多くの人が集まれないようにしている。外観は当初のまま變つていない。入口の位置や、階上の階段などなかなか趣きがある。

明治の洋風建築としては必ずしも規模は大きくないが、吉野の奥地でこうした華麗な特色ある洋風建築の役場が、今なお健在であることは県下では例のないことだらう。しかしこの建物も耐久力の限界に來ているから、いずれ恒久的な新しい庁舎に生れかわることだらう。そうした機会によく整備復原して、永く保存されるよう切望する。

(土井 実)



黒滝村役場